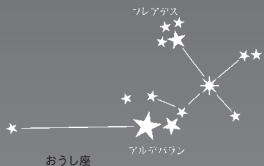


# ポラリスを仰ぐ北の大地から



## この世界の片隅に

岩見沢市医師会 会長 <sup>とくち</sup> 得地 <sup>ふみ お</sup> 史郎

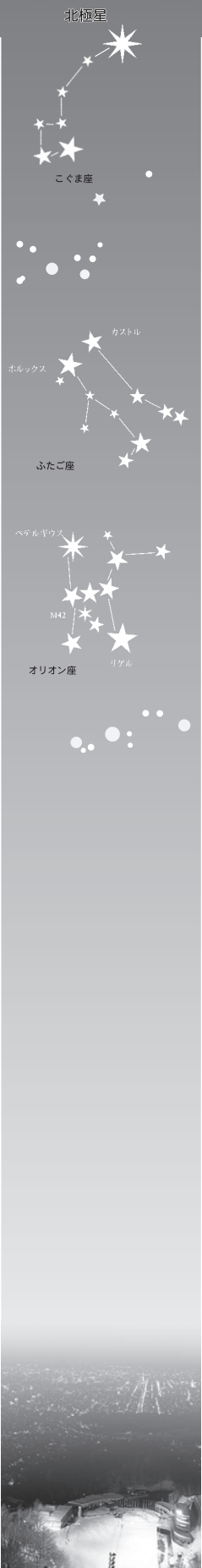
30年程前、ニューヨークのロックフェラー大学に留学していた私は、英語もままならず、研究の成果も思うように上がらなかった。そうした日々の鬱々とした気持ちをそっと癒やしてくれたのが、ブロードウェイのミュージカルであった。

音楽と舞台は言葉の壁を越えて、直接心に語りかけてくれた。その時の感動が忘れられず、帰国後も繰り返しミュージカルの舞台に通いつけている。

先日、私はミュージカル『この世界の片隅に』を観た。原作は、漫画家こうの史代が2007年に発表した同名の作品で、音楽はアンジェラ・アキが手掛けている。この舞台は、太平洋戦争末期、激しい空襲に襲われた広島県呉市を背景に、主人公・すずが日常の中で葛藤しつつも生き抜く姿が繊細に描かれている。すず役を演じた昆夏美は、主人公の心の奥底にある悲しみや希望を美しいメロディーに乗せて歌い上げた。原作者、音楽家、俳優たちの発信する平和へのメッセージが、感動をもって観客の心に届けられたのである。それはまさに、総合芸術の真髄であった。

昨年、北海道新聞でアンジェラ・アキが中学生たちに「生きる力」について語っていた。彼女は、自身の体験を振り返りながら「人は生きていてだけで価値がある」と伝えるが、その言葉は、そのまま戦禍に苦しむ人々への励ましと重なる。

2025年の元旦を迎えた今、私は改めて、平穏な日常がいかに貴重であるかを思わずにはいられない。ミュージカルで描かれた戦禍の日本は、終戦後80年に亘って戦争を免れてきた。しかし、世界の片隅では今なお、ウクライナやパレスチナをはじめ、戦争や内乱により、多くの人々がいつ果てるとも知れない苦しみにあえいでいる。戦争を止めることは容易ではない。それでも、この世界の隅々に、いつの日か必ず、恒久的な平和が訪れることを願ってやまない。



## 趣味

上川北部医師会 会長 <sup>いずみ</sup> 和泉 <sup>ゆういち</sup> 裕一

最近、「趣味は何ですか？」という質問をされるのが一番困っている。それは現在「私の趣味は〇〇です」と言えるものがないから……。以前は「多趣味」をモットーに多くのことを積極的にやってきた。残念ながら元々が知性派でなく、根っからの体育会系で、子供の頃からスポーツというスポーツはほとんどやってきたし、プロ・アマ問わずあらゆるスポーツ観戦も好きで、実況のみならずニュース・特集でもよく観ていた。しかし、最近は何のプロ野球チームが首位なのかも注視しておらず、試合結果を夜のニュースで確認することもなくなった。医師としては若い時の方が時間的な余裕もないはずなのに、何かと時間を作っては仕事以外の楽しみを持っていたような気がするが、いつの間にか「仕事が趣味」という今どき禁句の生活にシフトしていたかもしれない。ゴルフからも遠ざかり、年に1度の院長杯ゴルフ大会への参加のみになっていた。実は音楽もそれなりに好きだったが、今は歌手も曲も中身も深く知らずにただバックに流れていればそれでいい感覚になっている。次々と浮かぶこのような状況を分析すると、何の魅力もない引退後の寂しい生活が垣間見えてきて、ネガティブな気持ちになってくる。

少しでもポジティブにと考えてみたが、当然外科医としてはすでに必要とされないだろうし、地方は医師不足といっても自身の能力では昔外科医の“なんちゃって”総合医も無理なことは自覚している。では私生活はどうか考えると家庭は後回しの仕事三昧だった夫は今となっては粗大ゴミ(?)、子供たちも独立し家庭を持っているので、父親としてはすでに必須アイテムではない。時々会う孫たちは可愛いが、成長し友達が増えていけば、そのうち遊び相手のリストから外されることは容易に予想できる。今さらながら、趣味として夢中になれるものを真剣に探そうとしているが、テキトーな性格を反映し、考えるのが面倒になって先送りする日々である。